

【巻頭言】

「情報化社会・メディア研究」前書きをかねて

放送大学教授・放送大学附属図書館長 柏倉康夫

「情報化社会・メディア研究」も今回で第5巻を発行することができた。目次でご覧の通り、修士研究成果報告9篇と、研究ノート2篇、論文2篇という充実ぶりである。問題関心は多岐にわたり、各篇はいずれも興味深いテーマを扱っている。それぞれが皆様方に知的喜びを与えることができると確信している。

ところで、私は2005年11月に『生成するマラルメ』（青土社）を刊行したが、その後、ステファヌ・マラルメにまつわる新たな資料を手に入れた。これら資料に基づいて若干の誤りをただし、曖昧だった点を明らかにするためにこの場をお借りしたい。

1. アンリ・ルニョー

第1の点は、同書の182頁の、「一周忌を期してルニョーの作品の回顧展を催し、カザリスとアルチュール・デュパルクが短かった画家の生涯を扱った伝記を執筆して、ルメール書店から刊行した」という記述にかかわるものである。このとき書肆ルメールから刊行されたのは、アンリ・カザリスが著した『アンリ・ルニョー、その生涯と作品』（Henri Cazalis: Henri Regnault sa vie et son oeuvre, Alphonse Lemerre, 1872）であって、デュパルクは同じ年に、ルニョーの残された書簡を集めて刊行したというのが正確な事実である。カザリスはこの本によって、ナポレオン高等中学校の同級生だった画家の短かった生涯と画業を、皆の記憶にととどめようとしたのである。

カザリスは冒頭にアンリの父ヴィクトール・ルニョーへの献辞を載せ、これが子息を亡くした父にたいするせめてもの慰めになればと述べている。

アンリ・ルニョーは1843年10月30日に生まれた。ステファヌ・マラルメの1歳年下で、『生成するマラルメ』で「1歳年上」としたのは誤りである。彼の父ヴィクトール・ルニョーは、コレージュ・ド・フランス教授で科学アカデミーの会員、有名なセーヴル陶器の製造所の所長を25年にわたってつとめたから、アンリは幼いときはパリ南郊のセーヴルやムードンの森を駆けまわって過ごした。

家族の友人には著名な文学者や科学者が多く、よくルニョー家を訪ねてきた。彼は名門ナポレオン高等中学校へ入学し、そこで同級生のカザリスや先輩のエマニュエル・デ・ゼッサールと知り合った。早くから画家になることを目指していたアンリは、17歳で画家ラモットの画塾に入学し、ここでアングルとフランドランから手ほどきをうけた。まずは当時の主流だった古典派のもとで絵を描き始めたのである。

マラルメが初めてルニョーと出会ったのは、前書で述べた通り、1862年5月11日に行ったフォンテーヌブローへの遠出のときである。この日の遊楽はマラルメが卒業したサン・高等中学校の教師で、詩作の先輩であったエマニュエル・デ・ゼッサールの肝いりで行われ、アンリ・カザリス、ルニョー、マラルメ、さらには4人の女性たちが参加した。彼らはこの日の出会いを機会に友人となり、生涯にわたって交友を重ねることになった。

ルニョーは翌1863年には国立美術学校へ入学し、同時にカバネルのアトリエに通い、1864年には「サロン」に出品し、さらに翌65年には若手画家の登竜門である「ローマ賞」の審査に応募した。このときは賞こそ逃したが、審査員たちはルニョーの才能を認めてメダルを授与した。

カザリスは著書の中で、ルニョーがこの年にマラルメ宛てに書いた手紙を紹介している。「不思議な変貌が私のうちで起こっている。私は夢想家となり、内に籠っている。・・・日常の、世間の言葉が嫌でたまらない。画家や詩人にとっては雲の彼方に住むことが必要だろう。そこで狂気の叫びのなかにすべてを忘れ、降り注ぐ純粋性のなかで忘我状態になることが必要なのだ。世間の物音はなに一つ聞こえず、下界の煙は一筋たりと目にすることはできない。ただ、聞こえるか聞こえないかの微かな鐘の音が昇ってくるばかりだ。青空と無限が完璧に調和し、私たち生者にとっては繊細にすぎて堪えがたい感覚を味わうために、生きることを止めることが出来ないのだろうか。そう、私は芸術へと飛翔しようと努めているのだ。だが、私は大変な不能の時期にいるのだと思う。君もまたそうした時期を通り過ぎたに違いない。それはまた、これまでは隠されていた世界全体が私たちの前で展開される瞬間でもあるのだ。山々の頂を覆っていた巨大な雲は消え去り、深淵の暗い影さえも光輝きだす。前代未聞の神秘の奥義に自分が到達したとを感じる瞬間でもある。長い間、盲目だった者が、突然、はるか彼方まで見通せ、その豊饒な光景に息を詰まらせるようだ。私は自分が大きくなり成長しつつあることを実感している。・・・」

マラルメはルニョーが述べている感覚に共感を覚えた。詩と絵画の違いこそあれ、2人は同じ道を歩みだしつつあった。

ルニョーが待望の「ローマ賞」を得たのは1866年のことである。彼は友人宛の手紙でこう書いている。「幸運を得て大変幸せだ。私はついに自分自身のために制作し、思うままに勉強し、大家たちの水準を探究する自由を得た。審査員たちは全員一致で私に『賞』をくれただけでなく、加えて、ルーヴル美術館での授与という晴れの舞台を用意してくれた。」

「ローマ賞」を得たルニョーは、副賞であるローマへの留学を翌年はたし、イタリア・ルネサンス期の傑作の数々を直接目にするとともに制作に励んだ。《アキレウスの馬を御す御者》(ボストン美術館蔵)がこの次期の代表作だが、この作品は題材や技法、色彩の豊かさの点でも、彼が形骸化したアカデミズムから離れて、ロマン主義とりわけドラクロアへの傾斜が見られる。事実、この頃の手紙には東方へ強い憧れが記されている。

ルニョーは2年間のローマ滞在ののち、1868年から70年まで、親友の画家ジョルジュ・クレランとともにスペインのマドリッドに滞在して、ヴェラスケスとゴヤの作品を学び、南国の強い光のなかにある風光と人々の情熱的な生きざまを堪能した。

ルニョーが伝説的な人物プリム將軍と出会ったのは、マドリッドのあるサロンでのこと

である。この出会いから彼の傑作の一つでルーヴルに展示されている《プリム將軍》が生まれた。ルニョーとクレランはジブラルタルからモロッコのタンジールまで足を延して、待望久しい東方の雰囲気味わった。今日ニューヨークのメトロポリタン美術館に収蔵されている《サロメ》は、タンジールで仕上げられた。作品では黒髪で胸をはだけた野生的な女性が箱に座り、薄物をはいた膝の上に大きな銅の皿をのせている。皿の上にはアラブ風の刀があり、女はそれを左手で握っている。彼女はこの刀でやがてヨハネの首を切ることになるのである。ルニョーは伝説のサロメを、ローマ郊外で見つけた田舎娘をモデルに描き始め、タンジールで完成させたのだった。ルニョーの描いた《サロメ》は、やがて詩篇「エロディヤード」を創作するマラルメにも影響を与えた。

アンリ・カザリスがもっとも筆を費やしているのは、ルニョーの最後である。ルニョーは1870年7月19日に普仏戦争が始まると、すべてを投げ捨てて帰国し、兵士として戦場に赴いた。配属されたのは第69歩兵連隊であった。アンリ・カザリスは、戦場でのルニョーの姿を正確に伝えるべく、彼の戦友たちから聞き取りを行って、数々の事実を明らかにしている。

ルニョーはこの年の11月にはセヌ河畔の街アスニエールの前線におり、12月末にはコロンプの前哨に立っていた。クリスマスはここで過ごした。彼の勇敢な行動はきわだっていて、直属の上官であるステンメッツ大尉はルニョーを将校に昇格させようとした。しかし彼は手紙で、「有難うございます、閣下。しかし、私はあなたのよき兵であり、平凡な士官をつくるために、それを失うべきではありません」と述べて、せっかくの申し出を辞退したのだった。カザリスは、「事実、戦火の下ではいつも先頭に立ち、撤退の際は常にしんがりをつとめた」と、兵士ルニョーの勇敢なふるまいに言及している。

カザリスはまた、ルニョーが戦場から婚約者のジュヌヴィエーヴ・ブレトンに宛てた手紙を幾つか引用している。そのなかの1通で、鉛筆で記された前哨からの手紙。「いつ終わるともしれない夜がようやく明けた。いとしい人よ、本当に恐ろしかった。でも嘆くまい。私よりももっと苦しんだ者がいるのだろうから。・・・一瞬毎に、凍った風がテントを持ち上げそうになった。私たちは氷の嵐の中にさらされていた。水筒の水はコチコチに凍り、足は無感覚になってしまった。隣のテントでは、可哀想な仲間たちのうめき声がする。・・・いつか君の部屋で温まることが出来るだろうか。君を愛し、祖国を愛している。それが支えだ。さようなら。」

年が変わって、ルニョーは一時パリへ戻ることを許可された。夢にまで見た暖かい暖炉のそばでの日々に、彼はふたたび力を取り戻した。ジュヌヴィエーヴのかたわらでは過酷な現実を忘れ、2人でする旅に思いをはせた。タンジール、そしていつかはインドへも行ってみよう。将来、友人たちを迎える自分たちの家の設計図さえ出来上がった。だが、夜間には敵機が爆弾を投下し、砲弾が炸裂する音が次第に近く聞こえるようになった。プロシャの攻勢は明らかで、敵はパリに近づきつつあった。離別の刻が迫っていた。

1871年1月17日火曜日、ルニョーに再度戦場へ出動するよう命令が届いた。正午、彼はみなに別れを告げると、パリ近郊のビュザンバルへ向かった。カザリスの伝えるところによれば、ルニョーは軍帽の裏に、身元を示す布を縫い付けていたという。そこには「ア

ンリ・ルニョー、画家、学士院会員ヴィクトール・ルニョー氏の息子」とあり、万一負傷あるいは死亡したときに、運んでほしい自宅の住所も書かれていた。さらに彼は手紙と写真をしるばせた封筒を小さなマフのポケットに入れており、封筒の上にはドイツ語で、「für meine Braut（わが婚約者へ）」と書かれていた。マフは寒い夜に指が凍傷にかからないようにと、ジュヌヴィエーヴがどうしても持たせた品であった。しかし、わざわざドイツ語で書かれた封筒は恋人のもとには届けられなかった。

戦闘は1月19日木曜日の夜明けとともに始まった。ルニョーのそばには画家で親友のジョウルジュ・クレランや他の戦友たちがいた。昼ころ、心配しているジュヌヴィエーヴのもとに、馬で様子を見に行った友人の使用人から、戦況は味方に有利だというニュースが届けられた。午後4時、冬の陽はすでに暮れ、ビュザンバルの公園前の林のなかで激しい銃撃戦が起こった。ルニョーとクレランはいつしかりぢりになった。退却のラッパが鳴った。クレランはルニョーを探したが見つからない。やがて退却した部隊に合流することができたが、ルニョーの姿はそこにもなかった。部隊の誰彼にルニョーの消息を尋ねたが、誰も知らなかった。負傷してプロシヤ軍の捕虜になったのに相違ない、そう自分に言い聞かせてみても、彼の不安は鎮まらなかった。

その日のうちにパリへ帰還したクレランは、夜の6時ごろ、ルニョーが戦場で遺体で見つかったとの知らせをうけた。遺体は戦場に放置されていたが、帽子の裏の書付から身元が分かり、希望どおりに指定の住所に運ばれてきたのである。翌週の金曜日、1月27日の朝、パリは降伏した。ルニョーの葬儀は同じ日にサン＝オーギュスタン教会で行われた。このときルニョーの父ヴィクトールは田舎に疎開していたために息子の死を知らず、葬儀の一切はブルトン家の手で行われた。葬儀にはアンリ・カザリスは出席できたが、トゥルノンにいたマラルメは、フォンテーヌブローの遊樂以来、深く親しんだ友の葬儀に参列することができなかった。

2. 「Crémaillère」

もう1つの資料は、雑誌「独立評論（La Revue Indépendante）」の1888年4月号（第7巻、18号）に掲載されたCrémaillèreと題した記事である。この単語は炉などに鍋をかける自在鉤をさすが、「自在鉤を吊るす」という表現は、客に食事を供して新居祝いをする意味である。この号は巻頭に「ジュール・ラフォルグの未刊の詩篇の一冊に関する書誌」を載せて、ラフォルグの20篇の詩をまとめた未刊行の1冊が見つかったことを伝えている。そして問題の記事はこの号の最後、202頁から203頁にかけて、6行分の説明と、それに続いて4行3節からなるマラルメの手になる1篇の状況詩が紹介されている。

『独立評論』の創立のお祝いに編集者たちが集った。そのための招待状をルイ・アネクティヌ氏がドライポイント（銅版画）で和紙につくり、それを詩句と組み合わせたものが、ここに復刻したのであるが、製版とテキストにあわせるために縮小したせいで美しさが損なわれたのが残念である。なお、テキストはマラルメ氏である。」

こうした説明のあとに、アネクティヌがドライポイントで、ポダグリアとおぼしい葉と

轉る 2 羽の小鳥、それににこにこ顔の太陽を描いた絵の上に、以下のようなマラルメの詩句が印刷されている。

Caressé par la réussite	成功にくすぐられ
Et dans les gants les plus étroits	ぴったりの手袋をはめた
Édouard Dujardin sollicite	エドゥアール・デュジャルダンが懇願するには
Qu'autour de neuf heures, les trios	凡そ九時ごろ、三月の

Mars, par même l'ombre endossée	三日、飾り立てた盛装は
D'un habit à crachats divers!	唾棄されるもと！
Vous visitez, onze, Chaussée	お訪ねください、十一番、ショセ・
D'Antin, son magasin de vers :	ダンタンの、彼の詩の店を、

La Revue avec bruit qu'on nomme	噂も高いこの「雑誌」	名づけて
INDEPENDANTE, Monsieur, pend	「独立評論」が、皆さん、賑々しい	
Une crémaillère d'or comme	新居祝いをいたします	
Le gaz en son local pimpant.	ガス灯のように金色に煌く粋な部屋。	

マラルメはデュジャルダンの求めに応じて、当初、1887 年 11 月 26 日に予定されていたパーティーのために、もう 1 つのテキスト（ベルトラン・マルシャル編集の新プレイヤー版「マラルメ全集」第 1 巻の 355-356 頁）をつくったが、パーティーが翌年の 3 月 3 日に延期となったために、新しい日付にあわせて韻を踏みなおして、このテキストにつくり直したのである。説明文にあるとおり、招待状は雑誌掲載にあたって縮小された上で印刷されたため、鮮明さにかけるうらみがある。オリジナルをぜひ目にしたいものである。

なお、次頁に「独立評論」に掲載された挿画と詩句の複写を掲げておく。

